



TITLE:

<研究ノート>リスベクタビリティとは何か

AUTHOR(S):

佐藤, 八寿子

CITATION:

佐藤, 八寿子. <研究ノート>リスベクタビリティとは何か. 教育・社会・文化: 研究紀要 1998, 5: 75-84

ISSUE DATE:

1998-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187204>

RIGHT:

佐藤：リスペクタビリティとは何か

リスペクタビリティとは何か

佐 藤 八寿子

On Respectability as a Social Norm

Yasuko SATO

0. はじめにー何がスキャンダルを構成するのか？

ケース① アメリカ。昨年、元教師メアリー・ルトノー（当時34才、既婚、4児の母）は、当時13才の元教え子の少年と性的関係を持ち妊娠出産。未成年に対する性的暴行犯として禁固刑に処された。模範囚であった彼女は仮釈放となるが、その間、禁を犯して少年と再会していたところを警官に発見され、刑務所に逆戻り。現在7年間の禁固刑に服役中で、精神セラピーを受けている。しかし、最近の健康診断で再び妊娠していることが判明した。胎児の父は少年である可能性が高い。(1)

ケース② 日本。3月5日に開幕する長野冬季パラリンピックの開会式で、聖火台への点火者へ渡す最終聖火ランナーに内定していたマラソンの五輪メダリスト・有森裕子さんに対し、大会組織委員会は内定を取り消すことを決定した。有森さんは一月に米国人男性と結婚したが、相手男性の金銭トラブルなどが報じられていた。夫ガブリエル・ウィルソン氏は、2月19日の披露宴の中止と別居を明らかにした会見の後半で、ゲイであった過去をも自ら告白した。(2)

スキャンダルとは何か？例えば上の出来事において、何がスキャンダラスか。問題点を明らかにするため、複数の異なる視点からの見解を提出してみよう。

①、少年が被害者として扱われることに不快を示し、元教師への愛情を認めていることから「禁断の純愛」という解釈が一方で成立しうる。事件後、元教師と夫との離婚はすでに成立している。恋愛至上主義の立場をとれば、むしろ年齢差や社会的障壁を越えて思いを貫こうとした2人の話は感動的だ。また、教師は確かに法的に犯罪者であるが、同様の事件が仮に外国で起こった場合犯罪とはならない場合もある。(3)

②、ウィルソン氏は借金については返済に努める旨約束しており、ゲイであったことについては、妻である有森さん自ら「それは個人の生き方の問題」であって、「過去にはこだわらない」と明言している。また、これは有森さん本人が引き起こした事ではなく、夫の不祥事をもって社会的に彼女の権利が剥奪されるのは、まったく不当であり人権侵害だという主張も成り立つ。しかし一方、アメリカ精神医学会発行の『精神障害の診断と分類の手引』から同性愛が削除されたのは1980年、国連世界保健機構（WHO）編纂の『国際疾病分類』ではつい1992年のことだったし、イギリスでは1967年の性犯罪法の手直しがあったとはいえ、場合によりホモセ

クシュアルを「犯罪」と見なす法律が今日も存在している(4)。日本のマスコミでこそまだこの程度の扱いであっても、他の社会であればはるかに激しい非難を浴びていた可能性はある。

さて、これらのことから何がわかるだろうか。

まず、当然ながら、スキャンダルすなわち犯罪ではなく、犯罪すなわちスキャンダルでもない。しかし、両者はかなり近い位置にある。また、疾病との関連も指摘できる。スキャンダル、犯罪、病気のいずれもが「その基準は各社会により相対的である」点を指摘するのは容易である。しかし、問題はむしろそこから出発する。

法への抵触如何に関わらず、何らかの形で社会的な規範に抵触した出来事は、スキャンダル、好ましからぬ風聞、不祥事とされ、それらはしばしば「道義的／倫理的／社会的責任上の」〈罪〉、あるいは〈恥〉と呼ばれる。上の2例で言えば、妻、母、教師「でありながら」、またはメダリスト「でありながら」それに「ふさわしいと期待される」社会的役割を「裏切る」行為が社会的反響を呼んだ。このことから、また通常「醜聞」と訳されることから、スキャンダルとはまず「美醜」の範疇に属する概念であり、また「風聞」として世間の反応を前提としているということが確認される。つまり、しかるべき「美意識」に反するということと、「社会性」の2点が、スキャンダルを構成する主要素であると言える。上の例とは異なるタイプの典型的スキャンダルとして「汚職」があるが、それもやはり「汚」すという美醜範疇の概念、そして果たすべき「職分」という社会性の概念によって構成されている。スキャンダルは、いわば「公序良俗に対する社会的罪」である。

では、ここで前提とされる「公序良俗」「美意識」「美風」とは何か。それは、法律や、善悪、正邪の概念とどれほど隔たったものなのか。

以下、今現在われわれが生きているこの社会の「公序良俗」を再認識する作業のひとつとして、リスペクタビリティという概念を検討する。リスペクタビリティは、近代市民社会、大衆の国民化、教育や教養、またメリトクラシー概念成立とも密接な関係にありながら、教育社会学の分野では全く看過されてきた。本稿は、教育社会学におけるリスペクタビリティの議論を準備するためのノートとして、主として先行研究を整理することを目的とする。まず前半では、リスペクタビリティ概念の歴史的、社会的位相を明らかにし、後半では「万人の道德」として成熟したリスペクタビリティの機能の典型例を、モッセGeroge L. Mosseの、*Confronting the Nation: Jewish and Western Nationalism* における「リスペクタビリティと教養」の議論を紹介しつつ考える。

1. ヴィクトリアン・リスペクタビリティあるいは「市民的価値観」

リスペクタビリティ respectability とは、「尊敬に値すること、りっぱさ、体面、世間体」を意味するが、狭義にはヴィクトリア朝時代のイギリス市民社会で使われた価値基準を指す。18世紀工業化とともに興隆した中流階級は、19世紀半ばヴィクトリア朝時代には社会の中核を担うようになる。彼ら中流階級によって生み出された規範の根底をなす理念が、リスペクタビリティである。同時期、依然支配階級であるジェントルマン階級は政治力を掌握し、かたや都市では労働者階級が形成されつつあった。中流階級は、自らのクラス・アイデンティ

ティとしての独自の理念＝リスペクタビリティを強力に意識し、うちだしていった。

・＜自助＞の精神

サミュエル・スマイルズの『自助』Self helpは、ヴィクトリア朝時代中期までの中流階級に愛読された代表的な著作である(5)。この作品の主題、＜自助＞＝「天は自ら助くる者を助く」が端的に示すように、個々の「勤勉努力」、勤労者として、あるいは家庭婦人として「自らの天職につくすこと」が、神のみむねにかなうこととされ中流階級の強い支持を得た。「祈り、かつ働け」という語(6)の流行も示すように＜自助＞の精神は宗教観として定着した。勤労に神聖な価値を与えるこの精神は、新興中流階級とりわけ実業家層にとって、非常に好ましいものに相違なかった。20世紀に入り資本主義が次第に組織化されていくにつれ、刻苦勉励の倫理はそのリアリティを失い、『自助』は読まれなくなる。しかし、その実効性が相対的に下落したのちも「勤労」の株は買い支えられた。成功者は自らの地位を正当化する神話として「勤労の価値」を必要としたからだ。スタイルとしての「勤勉さ」はリスペクタビリティという規範の中にすでに吸収され定着していった。

・リスペクタブルの表象

本来リスペクタブルとは、re- [反、返す、戻す、などの意] +spect [見る] という語のなりたちが示すように、著しく「まなざし」にとらわれた概念である(7)。

自助の精神を称揚するリスペクタビリティは、さらにその表象としての「外面的」要素をもひろく覆う包括的価値規準へと拡大する。信仰、勤労のみならず、生活領域全般にわたる行為、態度、作法、服装、金銭消費など、あらゆる面でリスペクタブルであることが理想とされた。

例えば、日曜日の礼拝に臨むため「土曜の給料日に『晴れ着』を質屋からおろし、月曜にはまた質ぐさに出して借りることも珍しくなかった。その一方、『晴れ着』を用意できない者は仕事着で出かけるより家に留まる方を選び、それを、貧しいけれどもリスペクタブルなこととの証しとした」(8)。

フーコーは、『監獄の誕生』1975で近代社会を特徴づける施設としてパノプティコン（一望監視装置）をとりあげ「自動的に不断の監視を続ける没個人化した権力」を論じているが(9)、このパノプティコンはイギリスの思想家J・ベンサムによって提唱されたものだった。ベンサムは1790年代の功利主義思想に基づき、「道徳の改革、健康の維持、勤勉の涵養、教育の普及」のための矯正施設として監獄をとらえたのだった。

・清潔・健康

ヴィクトリア時代初期のイギリスの都市は、一方で深刻な保健衛生問題をかかえていた。当時の、とりわけ労働者の生活は悲惨で、チフスや結核が蔓延し、例えば「1841年のマンチェスター在住者の場合、平均余命が24歳というようにおそろしく悲惨な『不健康』状態にあった」という(10)。こうした労働者層に対し、中流階級は主として家庭婦人のボランティア、チャリティによる訪問衛生教育などの運動をさかんに行い、「清潔」を広めていった。こうしたチャリティは、リスペクタブルな既婚女性にふさわしい行為とされた。夫がリスペクタブル＝勤勉である証として、自ら賃金労働をすることは許されなかったが、チャリ

ティは女性の社会的活動として大いに奨励された(11)。

こうした衛生指導の根底にある「清潔」は単に物理的問題ではなく、精神的規範でもあった。彼らにとって清潔であることと、道徳的に優れていることは直結していた。ベンジャミン・ウォード・リチャードソンの『ハイジア——衛生都市』(1875)は、当時の衛生観念を反映して著された理想郷論である(12)。「健全なる精神は健全なる身体に宿る」という健康観も、ギリシャ古典趣味の復興とともにヴィクトリア時代に急速にひろがったものだった(13)。

・言 語

清潔さは言語の上でも求められた。一種の「言葉狩り」がリスペクタビリティ普及の一環として実行された。

「神の言葉」すらも修正を免れなかった。キリスト教的な子供の躰に携わっていたサラ・カービー・トリマーというイギリス女性は、聖書をリスペクタビリティの新しい理想に沿って編集し直した。トーマス・バウドラーは、「家庭で朗読するのがはばかれるような」すべての字句を削除あるいは穏当に書き替えるなどして『家庭版シェイクスピア』(1818)を編集した。彼の名にちなんだ〈バウドラライズ〉(猥褻と見なされる言語について添削をするという意味)という単語が、この時期の英語の語彙に加わった(14)。その後続々と『家庭版〇〇』という修正版書籍の出版が相次ぐことになる。一方で、作者不詳のポルノグラフィが豊富に出版されたのもこの時代の特徴であった。

今日の、例えば「映倫」の仕事、あるいは「教育的」見地での童話や民話の「現代風」アレンジ、マスコミにおける禁止用語、自粛コード、などの現象が、バウドラーからの延長線上にあることがわかる。

かくして、金銭上の清潔さ、性的清潔さ、など、リスペクタビリティは、以後生活全般における多様な文脈の中で理解されることとなる(15)。

2. モッセのリスペクタビリティあるいは「万人の道徳」

さて、「人生の『正しさ』を確認するための特定の座標軸が、どのように形成されたのか」を検討する論文(16)において岩井八郎は、デグラ、パーソンズらの議論を紹介しつつ、1950年代アメリカ社会における「家族のルネサンス」現象、さらに今日自明とされている家族モデルが、実は例外的な諸条件の産物であることを指摘している。デグラによれば、1776年から1830年にかけて出現したアメリカの「近代家族」は、①パートナーの愛を基礎とし②家庭生活と社会生活の区別があり③子ども中心主義であり④小規模である、という特徴をもつ。性別役割分業をはじめとするこれらスタイルを正当化したイデオロギー、ヴィクトリア朝的道德観こそ、本稿で言う「リスペクタビリティ」にほかならない。このような家族モデルの再生した1950年代のアメリカは、岩井によれば、経済的繁栄、人口規模と相対所得の高さ、大恐慌経験世代のコウホート効果など、例外的な条件が揃った環境にあった。そこに復活した「ヴィクトリア朝的道德」に根ざす家族モデルを、パーソンズは〈普遍的モデル〉として論じて支持され

た。

それにしても、なぜヴィクトリアン・モデルなのか。その必然性の説明を、ドイツの国民化におけるG・L・モッセの歴史解釈に求めてみよう。

もともとイギリスの歴史と社会における概念であるリスペクタビリティに近代的普遍性を見だし、大衆の「国民化」の決定的要因として考察したことはモッセの独創であった。『ナショナリズムとセクシュアリティ』におけるキイ・ワードのリスペクタビリティという語は、ドイツ語訳版では市民道徳bürgerliche Moralと訳出されている。尊敬を意味するドイツ語Die Respektabilitätに、英語リスペクタビリティにあたる包括的価値基準としての意味は無いからである。モッセによれば、すべての人に生活の場での各々の持ち場を——例えば、男と女、正常者と異常者、自国民と外国人に——割り当てたのは、ほかならぬナショナリズムとリスペクタビリティだった。何であれカテゴリーの混同は、アンリスペクタブルであり、スキャンダラスで、社会に混沌と統制不能の危険をもたらす。リスペクタビリティは、変動期の社会における安寧秩序を求める声に応え、社会に不可欠な凝集性をもたらし、ナショナリズムと互いに補強しあうかたちで世界が無秩序に陥ることを救ったのだった。

「安寧秩序への欲求充足こそ、百年以上前に登場した作法と道徳がかくも長らく存続してきた理由の一つだった。もし国民主義が市民的価値観の支柱として組み込まれることがなかったなら、この作法と道徳がそれほど存続することはなかったであろう。」(17)

ここで我々は、アメリカにおいてヴィクトリアン・モデルが復活した「家族ルネサンス」の1950年代が、＜パクス・アメリカナ＞と呼ばれる時代だったことを想起しないわけにはいかない。南ベトナムへの介入が始まるまで、戦勝国・アメリカの社会において支配的だったのは、未だ一点の陰りもない愛国心、アメリカン・ウェイ・オブ・ライフの楽天的肯定だった。パーソンズがヴィクトリアン・モデルに普遍性を見出したことの背景には、アメリカのナショナリズムの高揚という要因もあったと指摘できよう。「万古不易のナショナリズム」という神話をとりいれることによって、人々は自らの日常生活を聖化することができたとモッセは言う。ヴィクトリア朝の中流階級婦人が宗教的使命感をもって衛生指導に回ったように、1950年代のアメリカは迷いなく自らのライフスタイルを世界に輸出したのかもしれない。かつて多くの日本人が憧れたアメリカ式生活様式は、実は「百年以上も前に登場した」価値観に裏打ちされた、ある意味で＜普遍的＞なものであった。

18世紀の市民的価値観として始まったものが、19世紀に国民の規範となり、ついには万人共通の道徳として成熟したことをモッセは指摘した。では次に、リスペクタビリティが具体的にはいかに機能したかをモッセに読んでみよう。

3. リスペクタビリティはいかに機能するか？

モッセは*Confronting the Nation*で、ヨーロッパ諸国におけるナショナリズムの勃興にとまなう日常世界観の変化と、そのことにユダヤ人がいかに対峙したかという問題を論じている。

すでに『大衆の国民化』においてモッセは、大衆運動と大衆の政治参加の発展の歴史にそくし、神話、シンボル、儀礼、祝祭によって群衆がアイデンティティを獲得していく様を「政治

の美学」によって「真の共同体への憧れ」が「新しい政治」へと具現化される過程として論じ、さらに『ナショナリズムとセクシュアリティ』においては、セクシュアリティにおける規範としてのリスペクタビリティに着目し、ナショナリズムとの密接な関係を指摘した。

本書においても、リスペクタビリティをはじめとするこれらの問題は繰り返し論じられているが、特に興味深い点は＜市民宗教＞civic religionという語⁽¹⁸⁾が新たなキー・ワードとして度々登場している点である。モッセはナショナリズムを新しい＜市民宗教＞にとらえ、かつてのキリスト教に代わって「真・善・美」をにない日常の世界観を支配するようになったと考える。またモッセは「教養」*Bildung*の問題に関しても「焚書とドイツ知識人の裏切り」という一章を割いて論じているが、本書全体を紹介する紙幅は本稿にはないので、「第9章 ユダヤ人の解放：教養とリスペクタビリティの間」を中心に、以下簡単に紹介することとする。

古典の学習と美的感受性の涵養に基づく自己陶冶を意味する「教養」の概念は、能力あるものに昇進の道を開き、より良い市民となれることを約束した。この新しい概念は、ユダヤ人にもドイツ社会における市民権への門を開くかに見えた。しかし現実には多くのユダヤ人が、フンボルトの教養の牙城たるギムナジウムではなく、実科ギムナジウム、実科学校に子どもを通わせた。主として商業取引を生業とする大半のユダヤ人にとっては、ギムナジウムで学ぶラテン語やギリシア語よりも実科学校で学ぶ数学がまず大切であり、ドイツ社会への参加においては経済力によるブルジョア化が先決問題だったからである。しかしながらそうした実科学校においても、＜ブルジョアの使命＞と自己陶冶の美德は繰り返し教育されていた。数学や科学や歴史をとおして「正しい考え」を身につける、という啓蒙主義的教育観はドイツユダヤ人にも浸透していたのだ。教養はリスペクタビリティと一対のものであり、人格形成に必要なたゆまぬ精進と個人主義は、道徳秩序にその錨をおろしていた。

政治的には依然ユンカー階級が実権を掌握していたとはいえ、すでにブルジョア階級が社会的に重要な役割を果たすようになっていた時代において、ドイツユダヤ人のブルジョア化は社会参加に不可欠の前提条件となった。市民の条件は財産と教養であり、ブルジョア化とは経済力と教養、そしてそれにともなうリスペクタビリティを身につけることだった。確かにキリスト教の洗礼をうけることはユダヤ人にとって依然として「最後の許可証」ではあったものの、世俗社会においてはまず教養とリスペクタビリティとが、立派な社会人あるいは「国民」として必要な通行証となった。中流階級、そして貴族階級にもいたユダヤ人は、すでにリスペクタビリティを受容することでドイツ化していた。ドイツユダヤ人の場合、洗礼よりむしろリスペクタビリティによって国民化は進展した。ここに「ナショナリズムという＜市民宗教＞」は、かつてのキリスト教にとってかわる。

原理として、「教養」という概念は開放的であるのに対しリスペクタビリティは制限的である。しかし現実には、教養はまもなく階級の独占するところのものとなり⁽¹⁹⁾、一方リスペクタビリティは比較的アクセスしやすいものとなった。とはいえ、社会の内部と外部に区別をたてる機能において、リスペクタビリティも教養と何ら変りはなかった。

つまり、リスペクタビリティの大衆化は、その概念がはらむ「アンリスペクタブルなアウトサイダー＝ユダヤ人イメージ」の拡大をも意味した。この過程でユダヤ人は、自らリスペクタ

ブルになればなるほど、アンリスペクタブルな存在としてのユダヤ人を否定するという、アイデンティティ・クライシスに追い込まれることになる²⁰⁾。

さらに、かつての宗教の機能を補いリスペクタビリティを下支えするものとして「医学」が登場したことをモッセは指摘する。これは、リスペクタビリティが「清潔」「健全」を重要な徳目としていたという事情と符号する。医学、とりわけ精神医学における成果は、リスペクタビリティにおける「健全」と「病氣」の対立概念を強固なものにし、「不健全」なユダヤ人イメージによって「健やかな」ドイツ人イメージはより完全な存在に止揚された。

しかし、いかに急進的シオニストの中にも、教養やリスペクタビリティそのものを攻撃するユダヤ人はいなかった。ドイツ人への同化に反旗を翻す彼ら自身の「ユダヤ的」ナショナリズムは、シンボルを多用するその示威表現においても、また教養とリスペクタビリティを踏襲したその内実においても、皮肉なことにドイツ・ナショナリズムと実は酷似したものだったのだ。

4. おわりに ― スキャンダルはなくなるか？

さて、ここであらためて冒頭の2つのできごとを読んでみる。

新聞の一面に載る建前的言説と異なり、このような三面に載るスキャンダル、ゴシップこそ、ある意味で、最も如実に我々の社会規範がいかなるものかを物語っていると言えよう。ここで問題となったコードをあげれば、結婚、性などセクシュアリティに関する問題、家庭における役割、教育における教師の役割、社会における年齢的序列役割、金銭消費にからむ勤労態度の問題、それからスポーツにまつわる衛生、清潔イメージ……。こうして見ると、我々が所与のものとしている「正しさ」がヴィクトリアン・リスペクタビリティの規範から実はいくらかも隔たっていないことが確認される。「今日でもリスペクタビリティは社会の慣習と道徳を決定している。すなわち、ここまでの記述を満たしてきた歴史を、今なお我々は生きているのだ。」とモッセは言う²¹⁾。

近代教育におけるマス・スクーリングは、社会的実用性を構成すると同時に「あるべき人間らしさ」もつくりだす。例えば、読み書き算術が役に立つかどうかだけではなく、「それができないものは人間でない」という側面すら出現してくることも指摘されている²²⁾。まさにこの間の事情をモッセは彼の歴史叙述の中で、身につけるべき教養、作法、道徳といった日常社会の問題として詳細に述べた。こうした差異読み取り装置をリスペクタビリティとするなら、そのリスペクタビリティを注入再生産するのが、学校であり、近代的教育であるということができよう。

ドイツ・ナショナリズムのナチズムへの昂進を述べた後、モッセは「この道徳に支払われねばならなかった代価は、高くつきすぎただろうか？」と問う²³⁾。代価とは当然、彼自身が経験したリスペクタビリティのジレンマ、すなわちドイツにおける反ユダヤ主義運動を指している。このリスペクタビリティにおける「代価」の問題は、例えばスキャンダルの餌食とされた者の痛み、ひいては閉じられた空間での「いじめ」問題をも連想させる²⁴⁾。リスペクタビリティ概念を柔軟に教育社会学的分析に導入することで、あるいはこれらの問題にも何らかの示唆が与えられるかもしれない。

つまり、「スキャンダルをなくすことはできるのか」（あるいは「なくすべきか）」という根本的問いである。

1970年代は「リブの時代」と呼ばれた。既成秩序、社会理念、規範に対する異議申し立てが行われ、かつて解放を最も強く求めたユダヤ人すらも攻撃しなかったリスペクタビリティが、この時ばかりは「桎梏」として激しい攻撃にさらされ、多くの疑問符を投げつけられた。今日我々の時代に依然として生きているとモッセの言うリスペクタビリティとは、言わば満身創痍で疑問符つきのリスペクタビリティである。しかし、ではこの古き「桎梏」はいつかは解かれるのか。何をしても咎められず、何事も自由で、スキャンダルなど無い社会は来るのか。リスペクタビリティを排することはできるのか。

答えは、無論「そんなことはできない」⁽²⁵⁾。我々が、所詮は何れかの文法にのっとってしか言語表現ができないように、社会生活は何らかの規範に基づかざるを得ない。ただし、文法そのものの検討、あるいは複数の言語の比較学習によって複眼的思考法を身につけることは可能である。

リスペクタビリティの教育社会学的研究が待たれる。

注

- (1) TIME, February 16, 1998 などによる。
- (2) 『朝日新聞』1998年3月1日、『週間朝日』1998年3月6日号などによる。
- (3) 日本では少女が対象の場合のみ犯罪となる。刑法第177条。
- (4) 1967年の修正により「私的な場での同性愛行為は、当事者が互いに同意しておりともに21歳に達しているならば、犯罪とはみなさない」ことになった。しかし「私的な場」についても(a)2人以上の人物が参加しているかその場に居合わせるとき(b)有料もしくは無料で公衆の利用できる便所、は除くと規定されている。詳しくは富山、1994参照。
- (5) 諸外国ですでに読まれなくなった『自助』の日本語訳『西国立志編』が、明治初期以来戦前までロングセラーを続けた「謎」については、受験的生活世界と関連してその精神がリアリティを持ち続けたことが指摘されている(竹内：1991：pp.123)。「西国立志編」は昭和期にも読みつがれ、「その部数は百万部を超えた。原書が発行されたイギリスの25万部をはるかに超えている」(竹内：1996：pp.9-10)。モッセがヴィクトリアン・リスペクタビリティを、ドイツ国民化の分析に適用したように、日本の近代化についてもリスペクタビリティに対応するものが機能していたと想定はできまいか。
- (6) Ora ei labora。もともと「貞潔・清貧・服従」の生活の特徴とした西方修道院の祖、聖ベネディクトゥス会の会則であった。
- (7) 教育における「まなざし」をめぐるのは、例えば、明治25年に起こった偽帝大生事件に関する社会史的考察がある(稲垣：1995：pp.64)。詐欺事件において帝大の制服制帽という学歴の「表象」はリスペクタビリティとして絶大な効果を発揮した。「学歴は人々の『まなざし』のなかで『プライド』や『貴種』として作用」した(竹内：1995：pp.89)。
- (8) 松浦：1994：pp.148。この「晴れ着」の話を、ゴフマンの「表舞台／舞台裏」の理論で理解することもできよう。
- (9) フーコーの指摘した近代的「従順な身体」への移行は、例えば近代日本における「受験生」という存在の出現にも確認される(竹内：1997)。
- (10) 松浦：1994：pp.135。
- (11) イギリスにおけるチャリティ精神が極めて階級自覚的な優越感に根ざしていることは多方面で指摘されている。大石：1994：pp.97-98。中山：1987：pp.211。このようなリスペクタビリティにおける構

- 造の問題は、フランス社会の問題を対象としたブルデューの理論による読解も可能であろう。ブルデュー：1990。
- (12) 松浦：1994：pp.143。
- (13) 村岡：1987：pp.249。「では病者には健全な精神は宿らないのか？」という単純な反駁に、この論理が耐え得ないことは少し考えれば誰しもが気づくことだ。にもかかわらず、スポーツマンが不祥事を起こせば「スポーツマンなのに！」という叱責を浴びる。
- (14) モッセ：1996：pp.11など。
- (15) 当時のリスペクタブルな生活の具体的叙述例としては、ディッケンズやラスキン等の同時代の文学があるが、ホブズボーム（1982）も詳しく考察している。
- (16) 岩井：1997。
- (17) モッセ：1996 a：228。
- (18) <市民宗教>は、フランス革命において反カトリックの宗教として標榜された。フランス革命における代替宗教としての<理性の祭典>についてはモッセ：1994、村上：1997：pp.55,56。<市民宗教>はルソーが『社会契約論』で導入した概念であり、市民に国家への愛を植え付けるその義務を果たさせる宗教にはかならない（野田：1998）。ルソーがなぜ社会契約の理論とほうまく噛み合わない「国家宗教」la religion civileの章を『社会契約論』につけ加えたのかを長らく疑問視していた西川は、ルソーのテキストよりむしろ革命の現実とその謎を解く鍵があると言う（西川：1998：pp.192）。ほか、例えばルーマンにおける<市民宗教>はしばしば「世俗化した神学」の意味で用いられているが、モッセの言う<市民宗教>はフランス革命後の<市民宗教>と同義であり、ベラーの宗教社会学理論とも共通する点が多い。ベラーによれば、アメリカにおける<市民宗教>は<制度的宗教>とは区別され、その中心テーマは「新しい選民としてのアメリカ人になる」ということにある。ヨーロッパからの広範な移民は、聖書における出エジプトであり、南北戦争は流血、死、そして古い罪を吐き出すことによる再生を意味した（ベラー：1991）。この「アメリカ人としての再生」、「アメリカ人になること」がモッセの論じる「国民化」に符号する。その他<市民宗教>については、ロバートソン：1983、ホセ・カサノヴァ：1997、など参照。
- (19) 「教養人」が最初こそ広く民衆に開かれたものであったが、19世紀を経るうちに狭隘化と排他性を余儀なくされたことに関しては、西村、1998、pp.391～参照。
- (20) リスペクタビリティをめぐるドイツ人とユダヤ人に関するこのモッセの説明に、エリアスの「支配層とアウトサイダー」関係の理論を重ねることもできよう。薄葉、1994。
- (21) モッセ：1996 a：pp.227。
- (22) 竹内洋：1992：pp.246-247
- (23) モッセ：1996 a：239。
- (24) 「礼儀」「敬意」に注目したゴフマンは「かげぐち」理論のモデルも提示している。また、リスペクタビリティ注入生産装置としての「全制施設」など、ゴフマン理論はリスペクタビリティのタームで解説しなおすことが可能だ。
- (25) 奥村隆は、自分の中に存在する「リスペクタビリティとその病」のふたつを、私たちは引き受けて生きて行かざるをえず、「このふたつを知ること、私の考えでは、そうするためのほとんど唯一の手段なのである」と言う（奥村pp.161）。ブルデューとホックシールド、さらにミュシャブレッドの叙述を「リスペクタビリティ」の観察として社会学的にまとめた奥村のノート「リスペクタビリティの病——中間階級・きちんとすること・他者」（同、第4章）は、本稿脱稿直前に入手したために上では十分に生かしきれなかった。今後の学習課題のひとつとしたい。

参考文献

- * Hyam, Ronald, 1992, *Empire and Sexuality: the British Experience*, Manchester University Press, Manchester
- * Mosse, Geroge L., 1993, *Confronting the Nation: Jewish and Western Nationalism*,

- Brandeis University Press, published by University Press of New England,
Hanover and London,
- * 稲垣恭子：1995：「教育・詐欺・学歴——学歴詐称の社会史にむけて」『教育現象の社会学』竹内洋ほか編 世界思想社
 - * 岩井八郎：1997：「ジェンダーとライフコース——1950年代アメリカ家族の特殊性を中心に——」『教育・社会・文化』第4号
 - * 薄葉毅史：1994：「＜文献紹介＞ *The Establishment and Outsider* by Norbert Elias and John L. Scotson」『教育・社会・文化』第4号
 - * 大石俊一：1994：『「英国」神話の解体—西欧近代と公正でない“フェア”の論理』第三書館
 - * 奥村隆：1998：『他者という技法—コミュニケーションの社会学』日本評論社
 - * カサノヴァ、ホセ：1994=1997：『近代世界の公共宗教』津城寛文訳、多摩川大学出版部
 - * ゴフマン、E：1967=1986：『儀礼としての相互行為——対面行動の社会学』広瀬英彦、安江孝司訳、法政大学出版局
 - * スマイルズ、サミュエル：1859=1981：中村正直訳『西国立志編』講談社学術文庫
 - * 竹内洋：1991：『立志・苦学・出世——受験生の社会史——』講談社現代新書
 - * ——：1992：『教育社会学』柴野昌山・菊池城司・竹内洋編 有斐閣ブックス
 - * ——：1995：『日本のメリトクラシー——構造と心性』東京大学出版会
 - * ——：1997：『立身出世主義——近代日本のロマンと欲望』日本放送出版協会
 - * 富山太佳夫：1994：「ホモセクシュアリティとは何か」土屋恵一郎編『ホモセクシュアリティ』叢書・イギリスの思想と文学 弘文堂
 - * 中山章：1987：「トマス・ライトに見る尊敬されうる労働者」村岡健次ほか編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房
 - * 西川長夫：1998：『国民国家論の射程——あるいは＜国民＞という怪物について』柏書房
 - * 西村稔：1998：『文士と官僚——ドイツ教養官僚の淵源』木鐸社
 - * 野田宣雄：1998：「国民国家から帝国へ」野田宣雄編『よみがえる帝国—ドイツ史とポスト国民国家』ミネルヴァ書房。
 - * バンクス／バンクス：=1980：『ヴィクトリア時代の女性たち』河村貞枝訳 創文社
 - * フーコー、ミシェル：=1977：『監獄の誕生——監視と処罰』田村淑訳 新潮社
 - * ブリッグス、A：1972=1988：『ヴィクトリア朝の人びと』村岡健次ほか訳 ミネルヴァ書房
 - * ブルデュエ、ピエール：1979=1989：『ディスタンクシオンⅠ』石井洋二郎訳、新評論
 - * ——：1979=1990：『ディスタンクシオンⅡ』石井洋二郎訳、藤原書店
 - * ベラー、ロバート・N：1985=1991：『心の習慣——アメリカ個人主義のゆくえ』島蘭進ほか訳、みすず書房
 - * ホブズボーム、E・J：1975=1982：『資本の時代』松尾太郎、山崎清訳、みすず書房
 - * 松浦京子：1994：「社会の規範——リスペクタブルであるために——」井野瀬久美恵編『イギリス文化史入門』昭和堂
 - * 村岡健次：1987：『「アスレティシズム」とジェントルマン—19世紀パブリック・スクールにおける集団スポーツについて』村岡健次ほか編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房
 - * ——：1980：『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房
 - * 村上陽一郎：1997：『新しい科学史の見方』日本放送出版協会
 - * モッセ、G・L・：1975=1994：『大衆の国民化』佐藤卓己、八寿子訳 柏書房
 - * ——：1985=1996a：『ナショナリズムとセクシュアリティ』佐藤卓己、八寿子訳 柏書房
 - * ——：1985=1996b：『ユダヤ人の＜ドイツ＞——宗教と民族をこえて』三宅昭良訳 講談社
 - * ラスレット、ピーター：=1986：『われら失いし世界——近代イギリス社会史』川北稔ほか訳 三嶺書房
 - * ルーマン、ニクラス：1989：『宗教社会学——宗教の機能』土方昭、三瓶憲彦訳 新泉社
 - * ロバートソン、R：1970=1983：『宗教の社会学——文化と組織としての宗教理解』田丸徳善監訳、川島書店